



TITLE:

八王の亂の本質

AUTHOR(S):

福原, 啓郎

CITATION:

福原, 啓郎. 八王の亂の本質. 東洋史研究 1982, 41(3): 457-487

ISSUE DATE:

1982-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153876>

RIGHT:

東洋史研究

第四十一卷 第三號 昭和五十七年十二月發行

八王の亂の本質

福原啓郎

はじめに

一 八王の亂の性格

二 輿論について

(一) 齊王冏に對する批判

(二) 齊王攸歸藩事件

三 八王の亂と貴族制

おわりに

はじめに

八王の亂は、三世紀末から四世紀初めにかけて、西晉王朝の外戚と宗室が起こした内亂である。内亂は當初、朝廷を舞臺にした外戚間の權力をめぐる抗爭に過ぎなかったが、軍隊を握る宗室が抗爭の主役となるに従い、その戰亂が全土に擴大し、それにつれて國家體制も弱體化し、ついには内徙の異民族及び流民集團が起こした反亂である永嘉の亂を招き、西晉王朝自體が滅亡するに至る。この中國全土を混亂の極に陥れた西晉の滅亡という事態は、漢帝國の瓦解がもたらした混

亂を收拾し、中國の再統一を果した魏晉國家體制の破綻を意味する。何故ならば、八王の亂は國家體制の根幹の自壞作用であり、その原因が外因ではなく、體制内部に求められるからである。それ故に、錯綜した經緯を辿り、不可解な様相を呈する八王の亂の本質を探究することは、遑って魏晉國家體制を、ひいてはその基盤である當時の社會を解明する上で、重要ないとぐちとなるであらう。

では八王の亂は、從來どのような方向で研究がなされてきたのであろうか。ふつう八王の亂の原因は、西晉の武帝が採用した諸政策に歸せられている。とくに天下統一後、州郡に配備していた軍隊を撤廢した措置の結果、西晉の主要な軍隊としては、京師洛陽の禁軍と各地に「封建」された、あるいは出鎮した宗室諸王の軍隊の二つが残り、しかも禁軍の多くは宗室諸王が統率したので、西晉の軍勢力が宗室に集中することになり、この宗室諸王が掌握する軍勢力を利用した外戚が、さらには宗室諸王自身が、たがいに權力をめぐり抗争したのが八王の亂であると理解されている。⁽¹⁾このことから西晉の「封建」制・兵制などの諸制度との關連で、八王の亂は研究がなされてきた。⁽²⁾その中で八王の亂そのものもつ意味を内面的に洞察したのが岡崎文夫氏である。

岡崎氏は、その主著『魏晉南北朝通史』（弘文堂、一九三二年）の中で、八王の亂を、宗室及び貴族を優遇する西晉王朝の政策が生んだ、奢侈の風潮の中で起こった「利慾を主とする家族羣（宗室・貴族とくに外戚―筆者注）の爭鬭」（同書一〇九頁）と把握し、八王の亂の素因を「利慾」という、抗争の主體となった人間がもつ欲望に求める。この岡崎氏の見解を繼承して、「利慾」という概念をさらに歴史的に展開したのが、谷川道雄・安田二郎の兩氏である。谷川氏は『世界帝國の形成』

（講談社、新書東洋史二、一九七七年）の中で、「それ（宗室諸王のもつ軍勢力―筆者注）は晉王朝の公權を支えるのではなく、

これを私權化する方向にはたらいた」（同書一〇〇頁）と、當時の私利追求の風潮に染まった宗室諸王が、本來國家を維持する機能であるべき軍勢力（さらには國家機構）を私物化した、その結果として起こったのが八王の亂であると論じ、また安田二郎氏は、「八王の亂をめぐる、―人間學的考察の試み―」（『名古屋大學東洋史研究報告』四、一九七六年所收）の中で、

古代の「里」共同體の解體により、個人として放出された人間がもつ、自己の「利欲性」を肯定し、それにより自己實現を追求する傾向が、魏晉時代の「浮競」の風潮を現出し、その「浮競」「という當時の人間のあり方」筆者注がより露骨に突出した社會現象として具現したのが「八王」の亂ではなかったか（同論文六八頁）と論ず。兩氏の八王の亂に對する認識を整理すると、第一に八王の亂の素因は當時の人間個々がもつ權力を求める私欲にあり、第二にその私欲は魏晉時代に廣汎に見られる奢侈の風潮と同根のものであり、第三にその風潮は漢帝國の瓦解が象徵する古代社會の秩序價值體系の崩壊がもたらした社會傾向であり、それ故に八王の亂は、古代から中世への時代の轉換期における秩序の混亂が政治史上に反映した結果であるとする點で共通している。⁽³⁾

八王の亂の研究のこうした方向は、この時代における基層社會の變動に、その主因を求めてゆく點、極めて視野が廣く、しかも正當である。しかし、この視點からだけでは一元的に過ぎ、八王の亂という現象を十分に解明しつくせないのではない。とくにこの轉換期に新たに形成され、社會體制となった貴族制と八王の亂との主體的な關係が見えてこない。魏晉國家體制の成立と密接に關連している貴族制と、その魏晉國家體制の自壊作用である八王の亂との關係が見出されなければならぬのではないか。

この論文では、以上の問題意識を念頭に置き、八王の亂の個々の抗争という現象を検討することから始め、その上で八王の亂の本質に迫りたい。

一 八王の亂の性格

八王の亂は、武帝炎が病歿し、その嫡子である惠帝衷が即位した翌年、すなわち元康元年（二九一）に起こった、賈皇后が外戚の楊駿を誅殺したクーデターに端を發し、光熙元年（三〇六）、對河間王顒の内戦で勝利を収めた東海王越が、この年に即位した懷帝熾の輔佐として、實權を掌握した時點で一應終熄するが、この間に外戚・宗室を中心に幾多のクーデ

第二表 八王の亂抗爭表

Na	抗爭が起つた年・月	當時の皇帝	討伐を受ける側の中心人物	當時の地位・官職	討伐を行なう側の中心人物
I	二九一、三	惠帝	楊駿	太傅	賈皇后
II	二九一、六		汝南王亮 衛瓘	太宰 太保	楚王瑋
III	三〇〇、四		賈皇后	皇后	(梁王彤) 趙王倫 齊王冏
IV	三〇〇、八	(趙王倫)	趙王倫	相國	淮南王允 吳王晏
V	三〇一、三 一四		齊王冏	皇帝	齊王冏 成都王穎 河間王頔
VI	三〇二、十	惠帝	齊王冏	大司馬	河間王頔 成都王穎 長沙王乂
VII	三〇三、八 一二		長沙王乂	驃騎將軍 (太尉)	河間王頔 成都王穎 東海王越
VIII	三〇四、七		成都王穎	皇太弟 丞相	(惠帝) 東海王越
IX	三〇四、八		皇太弟 丞相	王凌	新蔡王騰
X	三〇四、七 一三〇六、 六(十二)		河間王頔	太宰	東海王越
XI	三一、三	懷帝	東海王越	丞相 (太傅)	(懷帝) 荀晞

ターや内戦が續發した。(4) この八王の亂の諸抗爭の推移を整理したのが、第一表の「八王の亂抗爭表」である。この表を見渡すと、何故に西晉という統一國家が滅亡するまで抗爭が續いたのか、という素様な疑問が湧く。この疑問は、安田二郎氏が「何故にあればどうでに執拗に抗爭と興亡をくりかえさねばならなかったのか」(前掲論文、五六頁)と自問した、八王の亂の「根因」を問う問題に繋がる。この章では、安田氏の問題提起に對して、私なりに解答を出したいと考える。その方法としては、八王の亂の中の一抗爭を取り上げて、その性格を検討することから始めたい。對象としては第一表の(V)に挙げられている、趙王倫對齊王冏・成都王穎・河間王頔の三王の間で繰り廣げられた内戦を扱う。すなわち「三王起義」と稱される抗爭である。まず三王起義の経緯から見てゆきたい。

三王起義が起こった當時、實權を掌握していたのは趙王倫である。一言、説明を附け加えると、八王の亂を通じて帝位にあった惠帝は生來暗愚であつたために、つねに政治上の輔佐(輔政)が不可缺であり、

その結果、實權を掌握することができ、輔政の座をめぐり、外戚・宗室が抗争を繰り返したのである。そもそも趙王倫が惠帝の輔政として、實權を掌握したのは、賈皇后一派に對するクーデターによる。その功績により、相國・使持節・都督中外諸軍事・侍中に任命され、文武の實權を掌握した趙王倫は、その後も九錫の榮典を加えるなど、着々と自らの權威を高め、永寧元年（三〇二）正月、ついに惠帝の禪讓を受けるに至る。⁽⁵⁾このように趙王倫が禪讓を装い、帝位を篡奪したという状況において起こったのが三王起義である。⁽⁶⁾

三王起義の發端は、同年三月、鎮東大將軍・〔都督豫州諸軍事〕として出鎮していた許昌の地において、かねてより謀議を重ねていた齊王冏が、惠帝の復位という大義を掲げて舉兵し、それと同時に全國の「征・鎮・州・郡・縣・國」に對して、檄書を送ったことである。鄴の成都王穎・長安の河間王顒らが、この舉兵に呼應し、ここに三王を中心に趙王倫討伐の「義軍」が結成され、それぞれ京師洛陽に進軍した。⁽⁷⁾こうした三王側の動きに對して、趙王倫は禁軍を各方面に派遣した。かくして趙王倫對三王という宗室諸王同士（もともと趙王倫は皇帝を僭稱しているが）の内戦が始まる。戦況は當初、禁軍を主力とする趙王倫軍に有利であったが、淇水の戦いを轉機に三王軍が優勢となり、その結果、不利な展開に動搖した趙王倫の私黨の一部が、洛陽においてクーデターを起こし、趙王倫を誅殺し、幽閉されていた惠帝を復位させた。こうして趙王倫の敗北をもって、三王起義は終結し（同年四月）、⁽⁸⁾その戦後處理のために三王が入洛して、論功行賞を行ない（同年六月）、三王起義を首唱した齊王冏が新たに惠帝の輔政となる。以上が三王起義の経緯のあらましである。

ではこの三王起義は何故に起こったのであろうか。そしてその要因から如何なる抗争の圖式が浮かび上がるであろうか。まず第一に、宗室諸王同士の抗争という點に注目するならば、三王起義は宗室諸王の權力争いであり、その要因は宗室諸王各自がもつ權力欲であることと見ることが出来る。何故ならば、趙王倫はもちろんのこと、齊王冏ら三王ものに實權を掌握すると、趙王倫と同じ轍を踏み、權勢を振うようになるからであり、その點から推し量るならば、三王起義を首唱した齊王冏らも、實は自らの權力欲を満たさんがために舉兵したことになる。つまり趙王倫も三王も、權力志向をもつと

いう點においては同次元に立つといえよう。さらに趙王倫と齊王冏の個人的な關係に絞って、三王起義のより具體的な契機を求めるならば、かつて賈氏討伐のクーデターの際には、兩者は利害の一致により、クーデターに向けて結託したが、その所期の目的が達成されるや否や、論功行賞に不満な齊王冏は趙王倫に對し怨恨を懷き、それをきっかけに兩者は反目しており、それが抗争に發展したと考えられる。⁽⁹⁾ こうしたことを勘案すると、權力志向をもつ宗室諸王自身の個人的な利害が三王起義の要因であり、安田二郎氏が、權力への激しい欲望をもつ首領と、それを取り巻く同じ志向をもつプレーン・將士から成る「八王」の權力集團が、「對内的には分裂の、對外的には新たな敵對集團の擡頭をよびおこし、かくして結局は敗滅の途をたどらねばならなかった。」(前掲論文六一頁)と、八王の亂の抗争の性格を説明しておられるが、それがこの三王起義にも當て嵌まるのであり、それ故に三王起義は、「私」對「私」という圖式で表わすことができる。

しかし、この内戦が「起義」と稱されている點に注目するならば、宗室諸王の利害による抗争という性格とは異なった側面が現われるのではないか。結論から言うと、自己の權力欲により國家を私權化する趙王倫に對する、公權としての國家の回復を目指す大義名分の發動が三王起義の要因であると考えられる。趙王倫の國家の私權化がしだいにエスカレートし、その極限として帝位が篡奪されるという危機的な状況において、「趙王は道理に背き、ほしいままに篡奪という惡逆を行なった。それに對して天下の人も神も憤り怒らないものはいない」という盧志のこゝろに窺われるように、全國的な規模で趙王倫非難の輿論が高まる。そして有力宗室諸王の一人、齊王冏は、この「衆心の怨望に因り」、すなわち廣汎な趙王倫非難の輿論を背景にして舉兵したのである。⁽¹¹⁾ その結果、潘尼・孫惠・王豹の如く、齊王冏の幕下に馳せ參ずる人士が續出し、⁽¹²⁾ また各地において、齊王冏の檄に呼應して、起義に立ち上がる動きが現われた。⁽¹³⁾ こうして齊王冏を中核として、⁽¹⁴⁾ 「義を以て來たる」士庶百姓を主體とする「義軍」が形成され、趙王倫により私權化された禁軍と戦い、勝利を収める。

このように三王起義の底流に、私權化に對し、公權回復を目指す輿論の存在を見出すことができ、それ故に表面的には

「私」對「私」の抗争である三王起義は、「公」對「私」の圖式でもって表わすことができる。

では三王起義に見られる「公」對「私」の圖式は、八王の亂における他の抗争にも當て嵌まるであらうか。第一表に擧げられている諸抗争の經緯を順序を追って見ることにより確認したい。⁽¹³⁾

(Ⅰ) 外戚楊駿の「多く親黨を樹て、皆な禁兵を領せしむ」といった措置に對して、「公室は怨望し、天下は憤然たり」という空氣が生まれ、ついには賈皇后を中心としたクーデターが起こり、楊駿一派は誅殺された。

(Ⅱ) 「宗望」として輔政の座に就いた汝南王亮は、濫賞を實施するなどの失政により「望を失ない」、賈皇后の内旨を受けた楚王瑋の手にかかり、「廢立の謀」の嫌疑で誅殺された。

(Ⅲ) 賈皇后は「民の望」である愍懷太子を冤罪により廢嫡し、殺害した。それに對して「衆情は憤怨し」、もと賈氏の私黨であつた趙王倫が賈皇后討伐のクーデターを起こし、賈氏一派を誅殺した。

(Ⅳ) 「篡逆の志」を藏す趙王倫に對して、淮南王允が同母弟の吳王晏とクーデターを計畫したが、失敗に終り、逆に殺害された。「百姓」は淮南王允の死を歎いたという。

(Ⅴ) 齊王冏の自らを皇帝に擬すふるまいや私黨の重職への任用などの「驕矜僭侈」に對して、「朝廷は側目し、海内は失望す」。その機に乗じて河間王顒が擧兵し、その檄に内應した長沙王乂が齊王冏を誅殺する。

(Ⅵ) 河間王顒と成都王穎は、長沙王乂が不公平な論功行賞を實施したことや外戚の羊玄之らと「朝政を專權し、忠良を殺害した」ことを名目に擧兵し、その檄に「四海が響應した」という。戰鬪は長期化したのが、結局は河間王顒側に内應した東海王越の手にかかり、長沙王乂は收縛され、次いで殺害された。

(Ⅶ) 皇太弟の成都王穎は、宦官を重用し、また陸機一族を誅殺するなど、「僭侈、日に甚し」く、大いに衆望を失なり。これに對して、東海王越らは惠帝を奉じて擧兵し、檄を飛ばして「四方の兵」を召集、その檄に應じて赴く者が「雲集」したという。しかし鄭への進軍の途次、蕩陰にて成都王穎軍と遭遇し、敗北を喫す。そして惠帝は成都王穎のもとに拉致された。

(Ⅷ) 東海王越の後を受けて擧兵した、王浚と新蔡王騰(當時は東廩公)の聯合軍は鄭を陷落させ、成都王穎は惠帝を奉じて洛陽

に逃れる。

(X) 河間王顓配下の部將である張方が、惠帝を長安の河間王顓のもとに拉致した行爲に對して、「天下の怨憤」が河間王顓に集まる。東海王越は義を唱え、山東の「征・鎮・州・郡」に檄を傳え、惠帝の洛陽奉還を圖る。この内戦の渦中で、河間王顓と成都王穎は殺害され、また洛陽に歸還した惠帝もまもなく歿した。

(XI) 東海王越は懷帝の外戚である王延や側近の繆播らを殺害するなど威權を振った。こうした東海王越の「不臣の迹」は四海の周知する所となり、懷帝の密詔を受けた征東大將軍の荀勗が、東海王越討伐のために擧兵したが、東海王越が病歿したために抗争には至らなかった。⁽¹⁶⁾

このように、三王起義以外の抗争においても、基本的には實權を掌握する外戚・宗室が私權化に走り、それに對して非難する輿論が盛り上がり、そしてその輿論の期待を擔った、あるいはそれに乘じた、あるいはそれを先取りした、別の外戚・宗室が擧兵して、私權化に走った外戚・宗室を討伐する、という三王起義の類型を見て取ることができる。すなわち八王の亂は、個々の抗争がクーデターあるいは内戦と形態を異にし、それを取り巻く状況も變化しているにもかかわらず、「公」對「私」という圖式をもつ同型の抗争すなわち「起義」の繰り返しである。

さらに第一表を参考に、八王の亂全體の流れを見渡すと、最初に實權を掌握していた外戚の楊駿を倒した賈皇后が、楊駿に代り實權を掌握し、賈皇后を倒した趙王倫が次に實權を掌握し、さらにまた趙王倫を倒した齊王冏が代つて實權を掌握するというように、八王の亂は個々の抗争が同型で、しかもそれを繰り返すばかりではなく、實權を掌握した外戚・宗室の私權化とそれに對する輿論の反撥という一連の動きを環節として、個々の抗争が互いに相い連環し、八王の亂全體としては鎖のように繋がっている。そしてそれを順々に一つの方向に推し進めていったのは、目まぐるしく權力を爭奪しあった、いわば八王の亂の主役である外戚・宗室からは、一步離れた存在である輿論であった。

以上、八王の亂の性格をまとめてみると、第一に同じ圖式をもつ抗争の繰り返しであり、第二にその同型の抗争が相い

連環しており、第三にそれを推進したのが輿論の力であるということである。この結論により、この章の最初に出した、何故に抗争を繰り返さなければならなかったのか、という問題提起に對して、現象面では一應解答が得られたのではないか。

次に考えなければならないのは、では八王の亂を推進した當時の輿論とは具體的に如何なるものなのか、という問題であるが、それについては章を改めて考察したい。

二 輿論について

(一) 齊王罔に對する批判

八王の亂を推し進めた輿論とは如何なるものであろうか。この章では、はじめにこの問題を考察するために、齊王罔による國家の私權化とそれに對する輿論の反撥という一連の動きを對象に、輿論の具體的な現われとして、齊王罔に對する批判の内容を検討したい。

まず齊王罔の興亡の經緯を、彼による國家の私權化を中心に、簡單に記す。齊王罔が實權を掌握したのは、すでに第一章で觸れたように、永寧元年（三〇二）六月、三王起義を首唱した功績により、大司馬となり、惠帝の輔佐として政治を總攬したことによる。⁽¹⁷⁾そして實權を掌握した齊王罔は、しだいに私權化への傾斜を深める。そのありさまは『晉書』卷五九、齊王罔傳に

大掛りに「大司馬府の」第宅を修築し、そのために北側には「五穀市」を、南側には諸の官署を立ち退かせ、「増築のために」家屋を取り壊した數は數百にも及ぶ。「將作」大匠に營造させ、その規模は「西宮」にも匹敵する。また千秋門（宮城の西門）の牆壁に穴を穿ち、「西閣」に通じさせた。そして後房では「鍾懸」を行なわせ、前庭では「八佾」を舞わせるありさま。〔齊王罔は〕酒色

に溺れ、朝覲を怠り、府第に坐したまま百官の拜伏を受け、「三臺」(尙書・御史・謁者)に符敕す。官吏の任用は公正ではなく、自分(18)が氣に入つた者だけを厚遇する。……

と描かれており、むしろこの記述を鵜呑にすることはできないが、齊王罔の「輔政」の立場を利用して、第一に自らを皇帝に擬するふるまいや、第二に自分の私黨の重用となつて現われた、國家を私權化する傾向が窺われる。このような「驕恣」な齊王罔に對して、「是において朝廷は側目し、海内は失望す」(齊王罔傳)と、人心が離れ、その結果、太安元年(三〇二)十二月、長安の河間王顥・鄴の成都王穎らの舉兵を招き、直接には内應した長沙王乂との市街戰の末、齊王罔は誅殺される。(19)

この齊王罔の破滅に先立ち、齊王罔に對して、内外から様々な形で批判が加えられている。その批判を整理したのが、第二表の「齊王罔に對する批判」である。この表を見ると、批判を行なう人物の多くは名族出身の、いわゆる士大夫であり、彼らが齊王罔自身に諫争を試みるのである。そして齊王罔の場合に特徴的なのは、大司馬府の幕僚が府主である齊王罔に對して諫争を試みている點である。(20) この府主と幕僚の關係を考察してみると、そもそも府主に辟召されて幕僚となつた士大夫は、府主が自らに人心を繋ぎ留めるために辟召した人物、すなわち輿論の期待を擔っている人物であり、逆に言うならば、輿論を導く立場にある人物であり、それ故に幕僚の府主に對する批判は、輿論の具體的な代辯である。

では次に、齊王罔に對する批判の内容について検討する。齊王罔に對する諫争は、齊王罔の私權化傾向に齒止めをかけよう(21)と意圖する點で共通しており、その多くはさらに、齊王罔に「輔政」の地位からの退讓を求めている。たとえば孫惠の諫争の場合、政治を惠帝の弟である長沙王乂と成都王穎の二人に委任し、封國である齊國に歸藩(「之國」「就國」)せん(22)ことが提案されており、また曹據も、孫惠と同じく、中央の體制を萬全に固めてから歸藩せんことを、王豹は、齊王罔が宛(南陽)に退いて南州伯となり、鄴に鎮する成都王穎を北州伯となし、二人で惠帝を守り立てんことを提案する。これらの諫争が齊王罔に退讓を求める理由は何であらうか。たとえば、輔政の座に留まること自體、極めて危険であり、また(23)(24)

第二表 齊王罔に對する批判

大司馬府の僚屬		朝臣		處士		他の宗室諸王の僚屬		宗室諸王	
始名	出身	當時の官職	批判の形式と齊王罔の對應	内 容					
孫惠	吳郡富陽縣孫吳の一族	前の賊曹屬(戸曹掾)(東曹屬)	諫言を獻ず。齊王罔は納めなかつたが罪を加えなかつた。	齊王罔が行なつた「五難」と、現在居る「四不可」について述べ、萬機を二王(長沙王・成都王穎)に委ね、歸藩することを勧める。					
曹據	譙國譙縣曹魏の一族	記室督	齊王罔の下問に答える。齊王罔は納めず。	齊王罔がよく朝臣を選び、その後に歸藩することを勧める。					
王豹	順陽郡	主簿	箴規の牋を致す。齊王罔は長沙王父の勸めにより誅殺する。	鄭に鎮する成都王穎を北州伯に任じ、齊王罔は宛に赴き、南州伯となり、南北に二分し、それぞれの地域を統轄し、惠帝を輔佐せんことを勧める。					
江統	陳留郡圉縣	參軍	切諫する。	〈現存せず〉					
嵇紹	譙國鉅縣曹魏の姻戚、康の子	侍中(のち大司馬府左司馬)	書でもって諫める。齊王罔は嵇紹に謝したが、従わなかつた。	齊王罔の「驕奢」なふるまい、特に不急の建造の中止を求める。そして、「謙損之理」に従うことを勧める。					
王戎	琅邪郡臨沭縣	司徒(尙書令)	河内王穎の上奏文に關する齊王罔の下問に答える。齊王罔の謀臣葛旗が反論する。	三王起義の論功行賞における齊王罔の失策を指摘。二王(河内王穎・成都王穎)の舉兵には對抗しないで、「就第」することにより、大權を讓ることを勧める。					
鄭方	南陽郡		露版でもって極諫する。齊王罔は「若し子無ければ、則ち過ちを聞かざるなり」と答えるが従わなかつた。	齊王罔の五失(五闕)として、齊王罔自身の奢侈。宗室内の問題。異民族の侵入への對策。戰後の振恤。義軍に對する論功行賞。が挙げられている。					
陸機	吳郡吳縣	成都王穎大將軍府參軍?	「豪士賦」で風刺する。齊王罔は悟らず。(?)	三王起義の功績は齊王罔にあるのではなく、齊王穎は單に一時勢に乗っただけである。故に齊王罔の威權が天子を震わせるほどになれば人心が離れて、危機が訪れて、遂には顛仆するものも必然である。					
河内王	河内郡溫縣宗室	太尉	惠帝への上奏文	三王起義の第一の功績者は成都王穎であり、それにもかかわらず、齊王穎は洛陽で私黨とともに皇帝をも凌ぐふるまいを重ねており、こうした狀況に對して舉兵したのであり、長沙王父に檄を飛ばし、齊王罔を廢して「還第」させんとする。					

退讓という行爲が輿論の賞賛を博す、という理由も擧げられるが、退讓を求める士大夫の意識の根底には、陸機が「豪士賦」の序で議論しているように、齊王罔は「時勢」に乗って、三王起義を主唱し擧兵したのであるから、本來その功績は齊王罔個人に歸すものではなく、それ故に齊王罔が三王起義の功績により、輔政の座に就き、威權を振うこと自體が不合理である。だから大義に則り擧兵したのであるから、大義に則り歸藩しなければならない。という認識があり、「輔政」という座は國家の存立に關わる地位であり、本來「興望」が就くべきである、という輿論が背後にある。それ故に、齊王罔が自發的に退讓することは、第一章で考察した、八王の亂における因果的な連環を斷ち切ることを意味する。ところが河間王顒が齊王罔討伐のために擧兵した際に惠帝に上した上奏文には、擧兵の「大義名分」は、たとえ名目であるにせよ、齊王罔を「第に還らせ」、輔政の座から退かせること、すなわち強制的に退讓させることにあるとする。このように齊王罔に退讓を求める輿論の方向が、結果的には齊王罔を討伐し、八王の亂を推し進め、八王の亂における因果的連環を繋ぐ論理に轉化している。それ故に、洛陽に届いた河間王顒の上奏文を前に、齊王罔が朝臣を招集して、今後の對策を協議させた場において、王戎は自發的に「第に就く」ことを齊王罔に勧め、河間王顒擧兵の大義名分に沿うことにより、武力衝突を回避せんことを望んだが、それに對して齊王罔の謀臣である葛旗が卽座に、「漢魏以來、王侯の第に就いた者で、妻子の命を保った者が一人としていたか。このような議論をする者は斬る」と、王戎に激しく反論したように、すでにこの切迫した状況下においては、「就第」はすなわち齊王罔の死を意味していた。このように本來は抗爭を阻止するはずの輿論が、齊王罔を見離し、抗爭を推進する論理に轉化し得るのは、一つには輿論の根底には第一義に「公」なる國家の存立のことがあり、「私」なる齊王罔の存在は第二義であるからである。そして幕僚あるいは朝臣の立場から齊王罔を批判した士大夫は、その背景に輿論があり、その輿論の最關心事は國家の存立であり、具體的には政權中樞が輿論になつて

いるかが焦點であつた。

齊王罔の場合に見られる士大夫の批判の動きは、八王の亂の他の外戚・宗室の場合にも認められるのであり、八王の亂

を通じて、實權を掌握して私權化に走る外戚・宗室に對して、抗爭に至るに先行して、士大夫の批判という形で、輿論の意思が具體的に現われていたのである。

(二) 齊王攸歸藩事件

では、齊王罔に對する批判の場合に見た輿論とそれを自覺的に擔う士大夫のあり方は、單に八王の亂においてのみ現われる現象であらうか。次に八王の亂以前、武帝の治世下に起こった齊王攸（齊王罔の父）の歸藩をめぐる事件を取り上げて、その問題を検討したい。⁽⁶⁰⁾

武帝の唯一の同母弟である齊王攸は、かつては晉王の太子の位をめぐる武帝のライバルであつたが、その後、魏晉革命、さらに西晉の全國統一を経て、今度は武帝の皇太子司馬衷（のちの惠帝）のライバルと目されたのである。⁽⁶¹⁾ こうした情勢の中で、太康三年（二八二）十二月、齊王攸歸藩の詔敕が下つたのである。⁽⁶²⁾ それは皇太子の將來に危懼を懷く武帝が、内臣の馮紆・荀勗らの入智慧に従い、⁽⁶³⁾ 「封建」の實をあげるに名を借りて、齊王攸を左遷同然に京師から遠ざけ、皇太子の地位を磐石たらしめんがために意圖したものであつた。それ故に、内外に「遠きも近きも驚き嗟ぎ、朝も野も失望した」と、反響を呼び起こし、⁽⁶⁴⁾ とくに朝廷を中心に、齊王攸の留京を願ひ、武帝に諫爭する者が相繼いだ。ところが武帝はこの問題を帝室内の「家事」と看做し、それに對する批判を拒絶した。⁽⁶⁵⁾ こうして釀成された、いわば皇帝對輿論の對立は、翌年（二八三）三月、問題の焦點である齊王攸が歸藩の途次、急死したことにより一頓挫をきたす。⁽⁶⁶⁾ 以後、この事件の後遺症として、輿論が逼塞し、それとはひきかえに、外戚楊氏の權勢がますます強まり、そうした狀況が武帝歿後の八王の亂に繋がってゆく。⁽⁶⁷⁾

武帝の齊王攸歸藩の措置に對する輿論の動向を、今少し克明に追つてみたい。この事件以前に、たとえば、あるとき衛瓘が酔つたふりをして武帝の前にひざまずき、手で武帝の坐っている牀を撫きながら、「此の席が惜しゅうございます」

と言ったという逸話や、張華は、「後事を託すとすれば、誰がよいであろうか」という武帝の下問に、「明德にして至親の點、齊王攸を措いて他におりません」と答え、そのために外任として、京師から遠ざけられた事件などから窺えるように、その頃の輿論の趨勢は、岡崎文夫氏が「故に太子の愚闇なるにより太子を廢して司馬攸に位をつがしめんと欲する朝臣の一派もあり又そこ迄極端に行かずとも彼をして太子を輔佐せしめ、以て實權を其手に收めしめんとする一派もあり、溫健な輿論はむしろ最後の一派が代表して居たと見るべきであらう」（前掲書一〇一頁）と說かれるように、輿望である齊王攸が實權を掌握することを期待していた。それ故に、その齊王攸の排除を意味する齊王攸歸藩の詔敕が下されると、ただちに扶風王駿・李熹・王渾・羊琇・甄德ら朝臣が次々に切諫し、あるいは自分の妻である公主をして懇願させ、武帝の翻意を促そうと試みた。⁽⁴¹⁾ また歸藩に伴う齊王攸の典禮に關しての太常への下問に對して、庾粲ら七人の博士が連名で、その下問には答えずに、代りに齊王攸歸藩の措置自體を批判する内容の上奏を行ない、しかもその長官である太常〔卿〕の鄭默はその行爲を默認し、博士祭酒の曹志は博士らに同調するのみならず、別に上奏を行なった。こうして太常全體が批判する側にまわる格好となった。⁽⁴²⁾ このように武帝に對する輿論の批判が、この事件を機に朝廷を中心として一氣に噴出したのである。

では朝臣らは、何故にかくまで敢えて諫争を試みたのであろうか。その根據を上奏文の文脈の中に探りたい。對象としては王渾の上奏文を扱う。王渾（字は玄沖）は貴族の名門である太原の王氏出身で、かつて吳平定の戰役で功績があり、この當時は尙書左僕射（加散騎常侍）の任にあつた。文章は『晉書』卷四二、王渾傳に收録されている。⁽⁴³⁾ まずその内容をかいつまんで意譯すると、

かつて周では建國に際して同姓を封建し帝室の藩屏となし、それを永世の憲章としましたが、武王の弟である周公旦をとくに封國には歸らせずに、政治を輔濟せしめました。それは至親にして信義ある者を朝廷から遠ざけないという趣旨を明らかにするためであります。それ故に、周公旦は幼主（成王）を輔弼することができました。齊王攸の大晉における立場は、ちょうど周公旦の周における

立場と全く同じであります。だから齊王攸は皇朝を守り立て、政治に與らせるべき、まことに陛下（武帝）の腹心にして、二心を懷くことがない臣下であります。その上、齊王攸の人柄は修潔にして義信、さらにはうるわしい至親であり、その志には忠貞をもっておられます。今、都督の虚號でもって歸藩させ、内外の實權に與らせないことは、道理に悖るばかりではなく、先帝（司馬昭）及び文明太后の御遺志にも背くのではないでしょうか。もしもどうしても事宜にて齊王攸のような輿望を出鎮させなければならぬのならば、代りに汝南王亮を出鎮させばよいであります。古來より朝政を外戚に任せても、あるいは宗室に與らせても、全て弊害を伴ってきました。その一つ一つを丹念に防ぎきすることは到底不可能です。將來起こるかもしれない患禍を避けるための唯一の方策は、正道に従い、忠良の臣を求めるしかありません。もしも智計なるものをもって、至親でさえも疑惑をもたれるとするならば、疎遠なる者に至ってはどうして自らを保つことができましょうか。人々がこのような危懼を懷くということは、安寧を爲す道理ではありません。こうした情勢は國家を有つ者が最も忌避すべきものであります。愚考いたしますに、齊王攸を太子太保の任に就け、それに宗師の汝南王亮と外戚で朝望のある楊珧を加えた三人で皇太子を守り立て、また政治を擔當させるべきであります。そうすれば、一人が專權を振うという懸念もないであります。

となる。⁽⁴⁴⁾一言で言うならば、輿望である齊王攸を京師に留めて朝政に與らせよ、という内容である。つまり、前に見た當時の輿論の意向と一致する。それでは、王渾がこのように主張する根據は何に由來するのであろうか。その問題について考察する。皇帝の「至親」であり、しかも德望ある、國家第一の臣下の齊王攸が、皇帝の猜疑を受け、政權の中樞から遠ざけられるという事態は、ひいては皇帝にとっては、より「疏遠」なる存在である異姓の、「忠良」な臣下を不安に陥れる。何故ならば、このような血統、並びに資質の點で當然政治に與るべき筆頭の人物が疏外される狀況は輿論における人物評價と現政權を擔當する人物とが乖離している象徴であり、その意味で全士大夫に深刻な影響を與える。その結果、輿論と現政權との乖離という現象は、國家に對する信頼における人心の動搖という、國家を有する皇帝が最も忌避すべき國家存亡の危機をもたらす。このように王渾の議論は、國家の存立の原點を見据え、そこを起點として展開している。つま

り武帝の齊王攸歸藩という、輿論を無視した措置は國家自體の滅亡に繋がることと論するのであり、だからこそ、王渾は敢えて武帝に向かって諫争を試みるのである。⁽⁴⁵⁾

それ故に、王渾の上奏に代表される朝臣の諫争は、單に齊王攸という一個の人間の去就に關する批判に留まらず、この事件の背景である當時の政治状況、すなわち太康元年（二八〇）の全國統一後に顯著になった、公然たる官職の賣買や情實による選舉などの横行という形で現われる國家の私權化と、背後でその傾向を主導する外戚の楊駿や内臣の荀勗・馮統一派に對する批判でもある。逆に言うならば、齊王攸が憤死したこの事件は、國家の私權化への傾斜を象徵する事件なのである。

以上、この章の前半では八王の一人齊王冏に對する批判を、後半では齊王攸歸藩事件における武帝に對する批判を検討した。兩者を比較すると、表面的には前者は齊王冏の退讓を求め、後者は齊王攸の留京を求めるといふように、あたかも正反對のことを輿論が求めているかのように見えるが、一步踏み込んで考察するならば、前者では宗室の齊王冏による國家の私權化に對して、後者では武帝及びそのもとにおける外戚の楊駿による國家の私權化に對して、兩者ともに輿論がその状況を國家の存亡の危機ととらえ、その結果、士大夫が諫争を試みるという點で共通している。それ故に、齊王攸の歸藩事件と八王の亂の個々の抗争は、國家の私權化とそれに對する輿論の反撥という同じ構圖をもっており、その點から齊王攸歸藩事件が八王の亂における抗争の原型であることは確かであり、その意味では八王の亂の端緒をなす事件であるともいえる。そして、齊王攸歸藩事件が八王の亂の各抗争と異なる點は、その對立を解消するために武力が利用されず、その結果、抗争にまで至らなかったという一點に存する。⁽⁴⁷⁾

西晉國家に脈々と存在する輿論の内容はすでに検討されてきたように、その根底には公權としての國家の安定と存續を願望する精神があり、それは現實には現政權との關わりにおいて輿論における人物評價に基く、とくに「興望」を中心とする政權の確立の實現を圖る。こうした西晉時代における輿論のありかたの源流を遡って求めるならば、後漢の末年にお

いて黨錮の禁を惹き起こした清流運動に行き着くのである。それは外戚・宦官という濁流勢力が朝廷を壟斷するという國家の私權化への傾斜に對して、清流士大夫を主體とした、國家の公權としての性格の回復を目指す全國的な輿論の形成である。川勝義雄氏の研究によると、この清流士大夫の輿論、すなわち清議には、その原理として本來の國家のありかた、すなわち郷里の共同體の維持を目的とする、しかも天界の秩序に對應し裏附けられた普遍的國家、すなわち儒教的國家の理念があると説かれる。⁽⁴⁸⁾ こうした後漢末における輿論は、その基盤・主體・理念などの點で、後の八王の亂に現れる輿論と共通しており、この輿論が魏晉國家成立以後も貴族制の下において存続していたのである。

最後に、この時代に現われた輿論を中國史全體の中に位置づけてみたい。長期にわたり統一の時代が續き、あるいはたとえ分裂の時代においてさえも、統一の機運が存在していたというように、中國は常に統一への志向を内包しており、この中國においては、その基盤としての郷里社會における共同體の維持を意圖する、さらに究極の處では人間の一人一人の生を保障するための、公權としての國家は中國の統一を實現してはじめて十全の國家たりうるといふ、中國固有の國家のありかたがあったのではないか。そして、こうした國家を成立させ、中國を統一に導く志向が、この時代においては當時の士大夫を主體とする輿論という形で現われ、魏晉國家體制の成立と、それによる中國の再統一に與つたのではないか。では何故に、本來は中國の統一とその國家の存続を希求する理念に基く輿論が、八王の亂を推し進め、西晉國家の瓦解をもたらしたのであろうか。章を改めて考えたい。

三 八王の亂と貴族制

本來、國家の存続を希求する輿論が、何故に八王の亂を推し進めるのか。その原因を八王の亂の個々の抗争に即して求めるならば、國家を私權化する外戚・宗室に對する輿論の批判を「大義名分」として、舉兵し、その外戚・宗室を討伐した別の外戚・宗室が、その後、新たに國家を私權化することにより、抗争が繰り返すからであり、それ故に最初に提起し

た問題は、第一に、何故に外戚・宗室が私権化せねばならないのか、第二に、何故に輿論が外戚・宗室、とくに軍事力をもつ有力宗室諸王と結びついて、當面の國家の私権化を武力により解決を圖るのか、という二つの問題に歸着する。この章では、前者の外戚・宗室の私権化の問題について考察を加えたい。

この問題については、すでに安田二郎氏が前掲論文において考察されており、とくに外戚・宗室を中心とする權力集團の性格に注目され、それについて「爵賞志向をもつ將士層を結集し、權勢や封爵に強い志向を懷くブレーションに依據し、それ自身が權力への激しい欲望をもつ首領によって構成されていた」(五九頁)と説明されており、外戚・宗室の私権化への動きが、單に彼ら個人の私欲によってのみ起こされるのではなく、ある外戚あるいは宗室諸王を中核として結集したブレーション・將士ら私黨の權力志向の反映であることを示唆する。では、私黨の權力志向にはどのような背景があるのか。この問題を、趙王倫の第一の腹心であった孫秀を對象として考えてゆきたい。

孫秀(字は俊忠)は、趙王倫の帝位篡奪に伴い、ついには中書監・侍中・驃騎將軍・開府儀同三司となり、趙王倫をも凌ぐ權勢を誇った人物であり、まもなく起こった三王起義により、趙王倫とともに誅殺された。⁽⁴⁹⁾ そもそも、趙王倫とその私黨である孫秀の結託は、孫秀の本籍である琅邪郡(國)における出会いに始まる。はじめ琅邪郡の「小吏」(「小吏」であった孫秀は、當時琅邪王であった趙王倫の「近職の小吏」となり、「文才」を發揮して文盲の趙王倫に代つて文書を作製するなど、趙王倫のために働き、さらに趙王倫が趙國に改封されると、孫秀も「戸を徙して、趙人と爲り」、趙國侍郎に累遷するに至つた。⁽⁵⁰⁾ こうして趙王倫の信任を得て、その腹心となつた孫秀は、その後も趙王倫の背後につねにあり、賈氏討伐のクーデター、さらには帝位の篡奪などの策謀を回らした。⁽⁵¹⁾

このように孫秀は趙王倫と私的に結びつき、趙王倫が權力を掌握するのに盡力し、それにより自らもその權力に與るといふように、趙王倫との私的關係を基盤にして、ついには趙王倫の下で實權を掌握するに至る。そして權力を得た孫秀は、同姓の貴族である樂安(郡)の孫氏との「合族」⁽⁵²⁾や息子孫會の「尚主」⁽⁵³⁾などの工作を通して、自らを貴族化し、趙王

倫との私的な結びつきを超えた處で、さらに自己の權力を補強せんとしている。

では孫秀の生き方に色濃く現われている權力志向、あるいは上昇志向は何に由來するのであるか。かつて、琅邪郡の小吏であつた頃、孫秀は同郡の「郷議」に郷品を求め、それに對して王衍はじめそれを許す意思はなかったが、從兄の王戎の勧めで、結局は孫秀に郷品を與えたことがある。⁶⁷⁾この話からも窺われるように、孫秀は寒門（寒士）、あるいは寒人層の出身である。また、當時同郡の太守であつた潘岳の子潘岳は、小吏の孫秀を使役していたが、人閒扱いをせずに、しばしばむちうち、けとばした。後年、孫秀が「志を得て」、中書令になつていた時、潘岳に「孫長官は昔のおつきあいをおぼえておられますか」と問いかけられたのに答えて、「中心、これを藏す。いつの日か、これを忘れん（『詩經』、小雅、濕桑）」と言つたという。⁶⁸⁾この應答が示すように、孫秀はずっと潘岳に「宿怨」を懷いており、事實、潘岳を石崇・歐陽建らとともに、謀反の嫌疑で誅殺し、宿怨を晴らした。⁶⁹⁾この例のように、怨恨により次々と貴族を殺害した孫秀の行動には、貴族に對するコンプレックスが感ぜられる。とするならば、その貴族に對する反撥をばねにしたのが、寒門寒人層出身の孫秀がもつ「志」、すなわち權力志向ではないであらうか。そして、それを實現する手段として、趙王倫という一宗室諸王と結びつたのではないか。

以上見てきた孫秀のような、寒門あるいは寒人層出身で、自己の才能を據り所として、宗室諸王と私的に結びつくことにより、自らの出世を圖つた私黨は、八王の亂當時、他に河間王顒の部將張方ら、宗室諸王の幕下に數多く見出すことができる。⁶⁰⁾そして權力志向をもつ私黨が、同じ性格をもつ宗室諸王と結託し、あるいは無能な宗室諸王を操り、權力の中樞に突き進む狀況が、國家の私權化として輿論に映るのである。ここで寒門寒人層出現の背景を確認すると、魏晉時代に確立した貴族制が、貴族階層を生み出し、さらに固定化する中で、そこから疎外された存在として、内部では寒門（寒士）を、外部では寒人を出現させた。⁶²⁾この寒門寒人層が、貴族體制としての國家において、閉塞せしめられている自己の上昇志向を實現するための突破口として、宗室諸王と結びつたのである。とすれば、八王の亂の諸抗爭において、しばしば

その戦端を開き、あるいは抗争の中で勝敗の歸趨を決定した寒門寒人層出身の禁軍將校・兵士の動向も、宗室諸王の私黨のそれと同じ性格をもつものであらう。⁶³

そしてこれら權力志向をもつ外戚・宗室幕下の私黨並びに禁軍將校らが期待するのが、出世の契機であり、功績を擧げる機會であり、その最大の機會が、すなわち公權回復という大義名分を掲げた起義である。それ故に、彼らが起義の主導權を握るのであり、そのみならず、大義名分をより明確にするために、作爲的に討伐すべき相手の私權化傾向を増幅するなど畫策する。こうして國家存立のために、國家の私權化を阻止する意圖をもつ輿論がその意思を發現する場である起義が、ある私權化に走る勢力を滅亡させるのと同時に、別の同じ性格の勢力を登場させる場となる。こうした構造をもつ起義の繰り返しが八王の亂なのであり、起義という形の抗争が起こるたびに、一步一步國家自體が滅亡に近附くのである。

最後に、輿論の歴史的展開を軸に、八王の亂の構造を確認したい。後漢末期、郷里社會を基盤とし、清流士大夫を主體として形成された全國的な輿論は、それ以後も、その本來的な理念が、自覺的な士大夫の精神の中に脈々と受け繼がれ、公權としての國家を私權化する動きに對しては、より廣汎な支持を受けつつ、士大夫を主體に、それを抑止する方向で働く。ところが、その輿論が一方では、漢帝國崩壞がもたらした混亂から秩序回復を目指して、新たな國家體制の成立に關與することにより、現實には貴族制を形成し、その結果、階層としての貴族を生み出すとともに、そこから疎外された存在である寒門寒人層を出現させた。この寒門寒人層が、外戚・宗室と結びつくことにより、政權内に進出しようとする狀況が、とくに選舉の紊亂として現われ、國家の私權化と輿論に映り、その批判を受けるのである。このように考えるならば、八王の亂の本質は、輿論の歴史的展開の結果であり、表面的には、あたかも外戚・宗室の權力をめぐる抗争である八王の亂が、その底流では輿論が深く關わっており、その意味では、當時の貴族制が内包していた、理念と現實の矛盾のあらわれであつたといえよう。

おわりに

表面上は、外戚及び宗室相互の抗争に終始した八王の亂は、單に外戚・宗室が自己の權力欲によって起こした場合に想定し得るような、ばらばらで無秩序な様相を呈して展開するのではなく、外戚・宗室の興亡の繰り返しの中に、一つの方向性が認められ、その方向に推し進めた原動力として、當時の輿論が浮かび上がる。

この輿論は郷里社會を支持基盤とし自覺的な士大夫が主體として、公權としての國家が私權化される狀況、とくに政權を擔う人物が輿論の人物評價と乖離する狀況を、國家の存亡の危機と認識し、私權化を主導する勢力を批判するという形で現われる。このような輿論のありかたの系譜を迎へるならば、八王の亂以前、西晉武帝治世下に起こった齊王攸歸藩事件における、朝臣らの武帝に對する批判にその原型を、さらには後漢末の清流運動における輿論の形成に、その源流を見出すことができる。こうした輿論は、中國において常に存在する、統一國家への志向のこの時代における形態ではないか。

この本來は國家の存續とその中國統一を志向する輿論が、逆に八王の亂を推し進める結果をもたらした原因は、八王の亂の個々の抗争―起義―において見るならば、その中核に外戚・宗室があり、彼らを起義の中核に据え、抗争後には私權化に走らしむるのは、その幕下にある私黨、すなわち權力志向をもつ寒門寒人層から成る集團であり、彼らの行動が輿論には國家の私權化と映り、それに對する批判が再び起義を惹き起こすからである。この寒門寒人層は、輿論が魏晉國家體制形成において關與した際に成立した貴族制の所産であるから、一面では八王の亂は輿論の歴史的展開の結果であり、貴族制の理念と現實の矛盾であるといえよう。

以上まとめたように、この論文により、八王の亂の底流には輿論が存在し、それ故に、この時代の社會を規定する貴族制も八王の亂と密接に關連していたことが明らかになった。

八王の亂を解明する過程で次に前面に出てくるのは、第三章で提起した、二つの問題の内、残された問題である。すな

わち、起義という個々の抗争において、何故に輿論が外戚・宗室、とくに軍事力をもつ有力宗室諸王と結びついて、當面の私權化する勢力を討伐するという形で解決を圖るのか、という問題である。これは究極的には當時の皇帝權の問題に歸着する。何故ならば、當時皇帝權はある意味では皇帝のみならず皇后（及びそれに連なる外戚）・皇太子（皇太弟）、さらには「封建」された宗室諸王に分有されていたと考えられ、それ故に八王の亂の個々の抗争の發端の多くには、彼らの廢立があり、また彼らが起義側の中核として出現するからである。圖式的には軍事力をもつ皇帝と輿論を背景にもつ貴族により成る魏晉國家體制において、こうした皇帝權のありかたの本質は何なのか。この問題についても、八王の亂それに續く永嘉の亂において露呈してくる皇帝權のありかたを通して、考えられるのではないか。

この皇帝權の問題を解明してはじめて、八王の亂のみではなく、「はじめに」で言及した、魏晉國家體制、さらにはその基盤である當時の社會を把握することができるとであろう。以上の問題を今後の課題としたい。

註

- (1) 宮川尚志「黃巾の亂より永嘉の亂へ」（『六朝史研究 政治・社會篇』一九五六年所收）三八—四二頁（八王の亂について、西晉の軍備縮小と諸王封建）、濱口重國「魏晉南朝の兵戶制度の研究」（『秦漢隋唐史の研究』上、一九六六年所收）三七六—九頁（東晉・南朝の兵戶制の史料）、刺史と兵權）、大澤陽典「西晉政治史の二・三の問題、——八王の亂の前史として——」（『立命館文學』三七・三七二合併號、一九七六年所收）。
- (2) 主な論考を列舉し、その内容を略述する。越智重明「封王の制と八王の亂」（『魏晉南朝の政治と社會』一九六三年所收）では、宗室諸王が封國支配と四征將軍としての支配を一體化することにより、「自律的獨立的勢力」を蓄えたことが八王の亂の一因であると考察する。また唐長孺「西晉分封與宗王出鎮」（中國社會科學院歷史研究所編『魏晉隋唐史論集』一、一九八一年所收）では、呂思勉氏の「……八王之亂、由於方任之重、而不由封建、明矣」（『兩晉南北朝史』上冊、一九四八年、三一頁）という見解を踏まえ、司馬氏政權を鞏固にするために、宗室諸王を重要な諸州の都督に出鎮させたことが八王の亂を招いたと考察する。それに對して、祝總斌「八王之亂」爆發原因試探」（『北京大學學報』哲學社會科學版、一九八〇年六期所收）では、八王の亂を招いたという地方の宗室諸王及び都督の權力は、「專制主義中央集權制」を完備し、強力な皇帝權を形成していた中央の掣肘を受けており、八王の亂の主因は、中央にお

いて皇帝權を繼承した惠帝とそれを輔佐する大臣が、才望ともになき人物であつたために、その地位が爭奪の的となつたことにあつたと考察する。

(3) この認識は、宮川尚志氏が前掲論文の中で、黃巾の亂・三國の角逐・八王の亂・永嘉の亂と、戰亂に明け暮れる時代の基調として、古代から中世への轉換期における秩序の混亂により析出された人民が、新たな秩序内に再編成されてゆく過程とし、とくに流民集團が軍隊として軍閥、さらにそれが形成する國家に吸収されてゆくの注目する視點と通じる。

(4) 八王の亂の「八王」とは、『晉書』卷五九の列傳に收録されている汝南王亮・楚王瑋・趙王倫・齊王冏・長沙王乂・成都王穎・河間王顒・東海王越の八人の西晉宗室諸王を指す。この名稱は、散佚した盧綝の『晉八王故事』に由來する。盧綝は八王の一人成都王穎の謀臣盧志の甥で、彼自身も成都王穎の幕下にいた。他に『四王起事』の著がある。

なお、『晉書』卷五九には序論と論贊が附され、ここでは西晉王朝が「封建」制を採用したことは肯定し、その上で八王それぞれを西晉王朝を滅亡に導いた元凶として糾彈する。

(5) 『晉書』卷四、惠帝紀、永康元年(三〇〇)四月、及び永寧元年(三〇一)正月の條。卷三一、后妃傳上、惠賈皇后。卷四〇、賈充傳、附賈謐傳。卷五九、趙王倫傳。

(6) 反趙王倫の動きは三王起義が最初ではなく、その前年には、失敗に終つてはいるが、淮南王允のクーデターがあり(第一表、Ⅳ)、また未遂に終つてはいるが、梁王彤を擁立し趙王倫を打倒せんとする計畫もあつた。このように宗室を中心に、反

趙王倫の動きが、帝位篡奪以前にすでにあり、三王起義の主唱者である齊王冏も關與していた形迹がある。

(7) 宗室としては三王以外に、新野王歆(當時は新野公)や長沙王乂(當時は常山王)らが参加している。また嚴密に言うならば、河間王顒の動向は他の二王とは異なる。當初、河間王顒は齊王冏に呼應しようとした夏侯奭を誅殺し、齊王冏の檄書をもたらした使者を捕えて、趙王倫に送つたばかりではなく、一旦は趙王倫に援軍を派遣しており、情勢が二王側に有利なのを見て、はじめて趙王倫に敵對している。『晉書』卷五九、河間王顒傳。

(8) 三王起義の經緯については、『晉書』卷四、惠帝紀、永寧元年、三月・四月・六月の條。卷五九、趙王倫傳・齊王冏傳・成都王穎傳・河間王顒傳など。

(9) 賈氏討伐のクーデターの際には、趙王倫と齊王冏は、「趙王倫密與(齊王冏)相結、廢賈后」(『晉書』卷五九、齊王冏傳)と、協力して賈氏一派を一掃したのであるが、その論功行賞で齊王冏は自分の處遇(游擊將軍)に不満を懷き、「有恨色」(齊王冏傳)と、すでに兩者の關係には龜裂が生じている。そして趙王倫も、「内懷不平」(趙王倫傳)と、齊王冏を疎んじ、外任として洛陽から遠ざけ、その後も「必有異圖」(趙王倫傳)と、絶えず警戒を怠らなかつた。このように兩者の間には緊張關係が生じ、ついには抗爭するに至る。

(10) 『晉書』卷四四、盧欽傳、附盧志傳、「齊王冏起義、遣使告(成都王)穎。穎召(盧)志計事。志曰、趙王無道、肆行篡逆、四海人神、莫不憤怒、……」。他にも『晉書』卷三八、扶

風王駿傳、附新野王歆傳、「齊王冏舉義兵、移檄天下、〔新野王〕歆未知所從。……參軍孫洵大言於衆曰、趙王凶逆、天下當共討之。……」、卷五七、趙誘傳、「值刺史郗隆被齊王冏檄、使起兵討趙王倫。……會羣吏計議、〔趙〕誘說隆曰、趙王篡逆、海內所病、……。なおこの三例は、いずれも齊王冏の檄書を受けて對處を協議した際の、齊王冏側に加擔せんことを主張した議論に見えることである。

(11) 『晉書』卷五九、齊王冏傳、「〔齊王〕冏因衆心怨望、潛與離狐王盛・潁川王處穆謀起兵誅〔趙王〕倫。……」。

(12) 『晉書』卷五五、潘岳傳、附潘尼傳、「……〔潘尼〕聞齊王冏起義、乃赴許昌。冏引爲參軍、與謀時務、兼管書記、卷七一、孫惠傳、「永寧初、赴齊王冏義、討趙王倫。……」、卷八九、忠義傳、王豹、「〔王〕豹重賤曰……沉豹雖陋、大州之綱紀、加明公起事險難之主簿也。……」。

(13) 『晉書』卷五九、河間王頌傳、「及趙王倫篡位、齊王冏謀討之。前安西參軍夏侯爽自稱侍御史、在始平合衆、得數千人、以應冏、遣信要〔河間王〕頌。……」。卷六四、淮南王允傳、「及〔趙王〕倫誅、齊王冏上表理〔淮南王〕允曰、……洎興義兵、淮南國人自相率領、衆過萬人、人懷仇愾、啓國統滅絕、發言流涕。……」。

(14) 趙王倫側では禁軍が主體であるのに對して、三王側では宗室諸王が有する軍隊を中核にして、それに自發的に起義に赴いた士庶百姓が將士として加わっており、むしろ後者が三王側の主體であったと想像される。たとえば、『晉書』卷五九、成都王穎傳に「留義募將士既久。感恩曠思歸。或有輒去者、乃題鄴城

門云、大事解散、蠶欲遽。請且歸、赴時務。昔以義來、今以義去。若復有急、更相語。〔成都王〕穎知不可留、因遣之。百姓乃安」とあり、三王起義に赴いた人士が、起義が終った後も、

そのまゝ成都王穎の將士として鄴に留められており、その一兵士が歸郷した際のエピソードが語られているが、この記事は

「義軍」が如何なる基盤から成っていたのかを示唆する。また『晉書』卷三九、王沈傳、附王浚傳に「及趙王倫篡位、三王起

義兵。〔王〕浚〔當時、寧朔將軍、都督幽州諸軍事〕擁衆挾兩端、遏絕檄書、使其境內士庶不得赴義。成都王穎欲討之而未暇

也」とあり、その地方長官が起義に加わらなかった地域においても、義軍に投じようとした動きが窺われることから、士庶

百姓が赴義に赴こうとする動きが全國的な趨勢であったことが推測される。そしてこのような基盤がある故に、義軍は「而

〔張〕泓・〔司馬〕雅等連戰雖勝、義軍散而輒合、雅等不得前」

〔『晉書』卷五九、趙王倫傳〕と、正規軍に對するゲリラを想起させるような戦闘を展開し、ついには禁軍を主力とする趙王

倫軍を破つたのではないか。またたとえば、齊王冏の檄書を受けた揚州刺史の郗隆が、逡巡して起義に赴こうとしなかったた

めに幕僚・將士の反撥を招き、殺害されたという事件からもわかるように、こうした動きが地方長官に對して、幕僚を通して、起義に應ずる方向に向かせたのではないか。註(10)参照。

(15) 八王の亂の諸抗争の経緯については、主に『晉書』卷四、惠帝紀、及び主要な登場人物の列傳、『資治通鑑』晉紀などによる。個々の抗争の典故については、一々擧げない。なお八王の

亂全體の流れを追うには、袁樞『通鑑紀事本末』の「西晉之

亂」の項が便利で、しかも示唆に富む。

(16) この事件は、起こったのが永嘉の亂の眞只中であり、しかも東海王越と荀晞の對立が抗争にまで至らなかつたのであるから、本來は八王の亂の中には入らない。しかし、當時輔政の地位にあった東海王越が威權を振い、それにより懷帝との間に對立が生じ、それが原因で荀晞が擧兵するに至つたという過程に、八王の亂の諸抗争と同じ性質が窺われ、しかも東海王越自身が八王の亂と密接に關わっており、そのために敢えてこの事件を八王の亂内の一抗争として擧げた。このように一方では永嘉の亂が起こつて、滅亡寸前の國家内部においてさえも、こうした内争が存在した事實からも、八王の亂が西晉王朝の抱えていた宿痼の如き感さえ懷かせる。

(17) 『晉書』卷四、惠帝紀、永寧元年六月甲戌の條。卷五九、齊王罔傳。なお『資治通鑑』卷八四、晉紀永寧元年六月甲戌の條參照。

(18) 『晉書』卷五九、齊王罔傳、「〔齊王〕罔於是輔政、居〔齊王〕攸故宮、置掾屬四十人。大築第館、北取五穀市、南開諸署、毀壞廬舍以百數、使大匠營制、與西宮等。鑿千秋門牆以通西閣、後房施鍾懸、前庭舞八佾、沈于酒色、不入朝見。坐拜百官、符敕三臺、選舉不均、惟寵親昵。……」。『資治通鑑』卷八四、晉紀太安元年十二月の條。『北堂書鈔』卷七〇、設官部、諸王所引の『王隱晉書』齊王罔傳。『世說新語』方正篇注所引の『虞預晉書』參照。なお齊王罔傳の後半に載せる、河間王顥擧兵の際の、齊王罔の罪狀を陳べた上奏文の記事と多く符合する。

(19) 『晉書』卷四、惠帝紀、太安元年十二月丁卯の條。卷五九、齊王罔傳・長沙王乂傳・河間王顥傳。卷六〇、李含傳。

(20) 八王の亂當時の外戚・宗室と士大夫の關係を考える場合、多くの外戚・宗室が「開府辟召」の權限を有していたことを考慮しなければならない。開府、すなわち公府あるいは軍府を開くことは本來、丞相・相國などの一品官に附帶する特權であつたが、驃騎將軍・衛將軍などの二品官も開府儀同三司を加官することにより開府することができた。開府することにより、一定の幕僚と軍隊を保持することができ、それにより才能・聲望ある士大夫を辟召することができた。それ故に八王の亂當時の外戚及び有力宗室諸王は例外なく開府しており（第一表參照）、また功績を擧げ、開府せんことを熱望する（『晉書』卷三八、齊王攸傳、附東萊王蕤傳）。また「百六掾」と稱された琅邪王睿（のちの元帝）の鎮東大將軍府（丞相府）が、東晉政權の母胎となつたように、當時の公府・軍府は制度の枠を超え、幕僚・軍隊を抱えて肥大化し、自己の政權の實現を志向する（宮崎市定『九品官人法の研究』二二七—九頁參照）。

(21) 『晉書』卷五九、齊王罔傳、「前賊曹屬孫惠復上諫曰、……今、明公（齊王罔）建不世之義、而未爲不世之護。天下惑之、思求所悟。長沙・成都、魯衛之密、國之親親、與明公計功受賞、尚不自先。今、公宜放桓文之勳、邁臧札之風。獨芻萬物、不仁其化、崇親推近、功遂身退。委萬機於二王、命力獄於羣后、耀義讓之旗、鳴思歸之鑾、宅大齊之墟、振決決之風、垂拱青徐之域、高枕營丘之藩。……」。

(22) 『晉書』卷九〇、良吏傳、曹掾、「……顧大王（齊王罔）居

高慮危、在盈思沖。精選百官、存公屏欲、舉賢進善、務得其才。然後脂車秣馬、高揖歸藩。則上下同慶、擡等幸甚。」

(23) 『晉書』卷八九、忠義傳、王豹、「……今誠能尊用周法。以成都爲北州伯、統河北之王侯、明公(齊王冏)爲南州伯、以攝南土之官長。各因本職、出居其方、樹德於外、盡忠於內。歲終率所領而貢於朝、簡良才、命賢儒、以爲天子百官。……今若從豹此策、皆遣王侯之國。北與成都分河爲伯。成都在鄭、明公都宛。寬方千里、以與圻內侯伯子男小大相率。結好要盟、同獎皇家。貢御之法、一如周典。……」。

(24) 王豹の腹に「豹伏思晉政漸缺、始自元康以來、宰相在位、未有一人獲終、乃事勢使然、未爲輒有不善也」とあるように、八王之亂が始まった元康年間以來、抗爭が打ち續き、輔政の座にいた人物で壽命を全うした者が一人もないという事實があった。

(25) たとえば成都王穎は三王起義後、自發的に鄭に歸還し、さらに三王起義の戰場となった地域の振恤や戦死者の埋葬を行なったので、人心が歸した。『晉書』卷五九、成都王穎傳。卷四四、盧欽傳、附盧志傳。

(26) 『文選』卷四六、序下、陸士衡(陸機)「豪士賦序」、「……是故苟時啓於天、理盡於民、庸夫可以濟聖賢之功、斗筭可以定烈士之業。言遇時也。故曰、才不半古、而功已倍之。蓋得之於時勢(世)也。……夫以自我之量、而挾非常之勳、神器隕其顧眄、萬物隨其俯仰、心玩居常之安、耳飽從諛之說。豈識乎功在身外、任出才表者哉。……身危由於勢過、而不知去勢以求安。禍積起於寵盛、而不知辭寵以招禍。見百姓之謀已、則申宮警守、

以崇不畜之威。懼萬民之不服、則嚴刑峻制、以賈傷心之怨。然後威窮乎震主、而怨行乎上下。衆心日移、危機將發。而方偃仰瞻眄、謂足以夸世。笑古人之未工、忘己事之已拙、知變動之可矜、暗成敗之有會。是以事窮運盡、必於顛仆、風起塵合、而禍至常酷也。聖人忌功名之過己、惡寵祿之踰量、蓋爲此也。……」なお、「豪士」が齊王冏を指すことは、『文選』卷四六、序下、「豪士賦序」注所引の『臧榮緒晉書』に「(陸)機惡齊王冏矜功自伐、受爵不讓。及齊亡作豪士賦」とあることから明瞭である。『晉書』卷五四、陸機傳參照。

(27) 『晉書』卷五九、齊王冏傳、「羽軍校尉李含奔于長安、詐云受密詔、使河間王顒誅(齊王)冏、因導以利謀。〔河間王〕顒從之、上表曰、……今輒勒兵、精卒十萬、與州征並協忠義、共會洛陽。驃騎將軍長沙王乂、同奮忠誠、廢冏還第。有不順命、軍法從事。……」。『晉書』卷五九、河間王顒傳、卷六〇、李含傳參照。

(28) 『晉書』卷四三、王戎傳、「既而河間王顒遣使就說成都王穎、將誅齊王冏。檄書至、冏謂(王)戎曰、……。戎曰、公首舉義衆、匡定大業、開關以來、未始有也。然論功報賞、不及有勞、朝野失望、人懷貳志。今二王帶甲百萬、其鋒不可當、若以王就第、不失故爵。委權崇讓、此求安之計也。冏謀臣葛旗怒曰、漢魏以來、王公就第、寧有得保妻子乎。議者可斬。……」。『晉書』卷五九、齊王冏傳參照。

(29) たとえば、楊駿の濫賞や專權に對する傅祗・石崇・何攀・傅咸・孫楚ら朝臣の批判、汝南王亮の濫賞に對する傅咸の批判、九錫を加えんとする趙王倫に對する劉頌の批判、宦官に唆され

て陸機一族を殺害した成都王穎に對する江統・蔡克・棗嵩ら幕僚の批判など。

(30) この事件については、岡崎文夫前掲書一〇〇—一二頁、大澤陽典前掲論文一〇—八頁、呂思勉『兩晉南北朝史』上冊（一九四八年）「齊獻王爭立」の節、三五一—四二頁、祝總斌前掲論文八—一一頁など参照。

(31) 武帝と齊王攸は、司馬昭（のちに文帝と追諡）とその正室元姬（文明王皇后）との間に生まれた子で、才望の點で兄の武帝に優る齊王攸は、祖父司馬懿（宣帝）・父司馬昭から、後繼者として兄以上に期待されており、そのために子の無い伯父司馬師（景帝）の後を嗣いだ。しかし、賈充らの盡力で、武帝が父司馬昭の後を繼いで晉王となり、魏晉革命において帝位に即き、齊王攸は齊王に封ぜられて、この問題は一應落着いた。『晉書』卷三、武帝紀。卷三八、齊王攸傳。卷三一、后妃傳上、文明王皇后。卷三五、裴秀傳。卷四〇、賈充傳。卷四三、山濤傳。卷九三、外戚傳、羊琇。

(32) 『晉書』卷三、武帝紀、太康三年十二月甲申の條、「以司空齊王攸爲大司馬・督青州諸軍事。……」。卷三八、齊王攸傳、「（武）帝既信（荀）勣言、又納（馮）統說、太康三年、乃下詔曰、古者九命作伯、或入毗朝政、或出御方嶽、周之呂望、五侯九伯、實得征之。侍中・司空齊王攸、明德清暢、忠允篤誠、以母弟之親、受台輔之任、佐命立勳、勦勞王室、宜登顯位、以稱具瞻。其以爲大司馬・都督青州諸軍事、侍中如故、假節、將本營千人、親騎帳下司馬大車皆如舊、增鼓吹一部、官騎滿二十人、置騎司馬五人。餘主者詳案舊制施行。……明年、策攸曰、

於戲、惟命不于常、天既遷有魏之祚。我有晉既受順天命、光建羣后、越造王國于東土、錫茲青社、用藩翼我邦家。茂哉無怠、以永保宗廟。又詔下太常、議崇錫之物。……」。

(33) 『晉書』卷三八、齊王攸傳。卷三九、荀勗傳、馮統傳。なお、當時の朝廷では賈充・荀勗を中心とする一派と任愷・和嶠を中心とする一派が對立しており、齊王攸はその政争の犠牲になったとも考えられる。丹羽允子「魏晉時代の名族、一荀氏の人々について」、『中國中世史研究』一九七〇年、所收）一九〇—一頁。

(34) 『晉書』卷五〇、論贊、「史臣曰、齊獻王（攸）以明德茂親、經邦論道、允釐庶績、式彼彝倫。武帝納姦諂之邪謀、懷始終之遠慮、遂乃君茲青土、作牧東藩。遠邇驚嗟、朝野失望。……」。王濟・甄德らが自分の妻である公主までを動員して、齊王攸の歸藩を思い留まらせようとした行爲に對して、武帝が激怒して侍中の王戎に言ったことばに「我兄弟至親。今出齊王、自朕家計。而甄德・王濟連遣婦人來生哭人邪。濟等尙爾、況餘者乎」（『世說新語』方正篇注所引の傳暢「晉諸公贊」）とあるように、そこには齊王攸歸藩の問題は帝室内の、しかも兄弟間の問題であり、すなわち「家計」（「家事」）『晉書』卷四二、王渾傳、附王濟傳）に屬する問題であり、輿論が介入すべき對象ではないという論理が窺われる。王渾・曹志らが議論するように、帝室は「公」的な存在であるから、輿論が關心をもつべき問題であるとする立場とは鋭く對立する。なお、「家事」という語については、宮崎市定『大唐帝國』（河出書房『世界の歴史』七、一九六八年）三四七—八、三五三頁参照。

(39) 『晉書』卷三、武帝紀、太康四年三月癸丑の條、「大司馬齊王攸薨」。卷三八、齊王攸傳、「〔齊王〕攸知〔荀〕勛・〔馮〕統構己、憤怒發疾、乞守先后陵、不許。帝遣御醫診視、諸醫希旨、皆言無疾。疾轉篤、猶催上道。攸自強入辭、素持容儀、疾雖困、尙自整厲、舉止如常、帝益疑無疾。辭出信宿、歔血而薨。時年三十六」。

(37) 『晉書』卷四〇、楊駿傳、附楊珧傳、「〔楊〕珧（駿の弟）初以退讓稱、晚乃合朋黨、擯出齊王攸。中護軍羊琇與北軍中候成粲謀欲因見珧而手刃之。珧知而辭疾不出、諷有司奏琇轉爲太僕。自是舉朝莫敢枝梧、而素論盡矣。これ以後、「三楊」と稱された外戚楊氏がますます權勢を振い、宗室では「宗師」で太尉の汝南王亮が武帝を輔佐した。そして武帝の臨終の際に、遺詔は汝南王亮と楊駿の二人が惠帝を輔佐することを命じていたが、楊駿の陰謀により、輔政の任は楊駿一人に歸した。また武帝の死の前年には、惠帝の藩屏として、すでに出鎮していた趙王倫（鄴に鎮す）ら宗室諸王とともに、新たに秦王東（長安）・楚王瑋（宛）・淮南王允（建鄴）の三子を要衝に出鎮させた。こうした狀況が八王の亂に繋がってゆく。

(38) 『世說新語』規箴篇、「晉武帝既不悟太子之愚、必有傳後意、諸名臣亦多獻直言。帝嘗在陵雲臺上坐。衛瓘在側、欲申其懷、因如解跪帝前、以手撫牀、曰、此坐可惜。帝雖悟、因笑曰、公醉邪」。（中國古小説集）筑摩書房『世界文學大系』七一、所收の『世說新語』の翻譯など参照。同、注所引の孫盛『晉陽秋』、『晉書』卷三六、衛瓘傳。

(39) 『晉書』卷三、武帝紀、太康三年正月甲午の條、「以尙書張

華都督幽州諸軍事」。卷三六、張華傳、「……會〔武〕帝問〔張〕華、誰可託寄後事者。對曰、明德至親、莫如齊王攸。既非上意所在、微爲忤旨、聞言遂行。乃出華爲持節・都督幽州諸軍事・領護烏桓校尉・安北將軍。……」。

(40) 皇太子が暗愚であるということは、當時周知の事實であり（『晉書』卷四、惠帝紀）、前の二例の他にも、武帝が和嶠を東宮に行かせて、皇太子の成長ぶりを確かめさせた際に、還ってきた和嶠が、「皇太子のご資質は相變らずでございます」と直言したという逸話（『世說新語』方正篇、同注所引の干寶『晉紀』、孫盛『晉陽秋』、『晉書』卷四五、和嶠傳）や、夏侯和が賈充に「あなたの二人の女婿（惠帝と齊王攸）は、親疏の點では等しい。人を擁立する場合、有徳の人を立てるべきです」といった話（『晉書』卷四〇、賈充傳）があり、また武帝自身も皇太子が帝位を保つことを危ぶんだが、皇太孫の司馬遹（のちの愍懷太子）が聰明なのに期待し、皇太子を廢立しなかったという（『晉書』卷三、武帝紀）。

(41) 『晉書』卷三八、扶風王駿傳。卷四一、李憲傳。卷四二、王渾傳。卷九三、外戚傳、羊琇。註39参照。

(42) 『晉書』卷四四、鄭袤傳、附鄭默傳。卷四五、劉毅傳、附劉暉傳。卷五〇、曹志傳、庾純傳、附庾翼傳、秦秀傳。『三國志』卷一九、魏志陳思王植傳注所引の『曹』志別傳。

なお、庾舅ら博士の上奏に激怒した武帝が尙書にその越權行爲を論議させたところ、尙書の朱整・褚曄らは、彼ら七人及び舅の父庾純を廷尉に付し、斷罪せんことを主張し、それに對して尙書夏侯駿は反駁し、左僕射魏舒・右僕射下邳王晃も夏侯駿

に同調するといふように對立し、また廷尉の劉頌が、大不敬を犯した庾勇らを棄市せんことを上奏するなど、この問題は紛糾したが、結局彼らを除名することで落着いた。『晉書』卷五〇、庾純傳、附庾勇傳。

(43) 『冊府元龜』卷五四〇、諫諍部、直諫門、『資治通鑑』卷八一、晉紀、太康三年十二月の條參照。

(44) 『晉書』卷四二、王渾傳、「伏承聖詔、憲章古典、進齊王攸爲上公、崇其禮儀、遣攸之國。昔周氏建國、大封諸姬、以藩帝室、永世作憲。至於公旦、武王之弟、左右王事、輔濟大業、不使歸藩。明至親義著、不可遠朝故也。是故周公得以聖德光弼幼主、忠誠著於金縢、光述文武仁聖之德。攸於大晉、姬旦之親也。宜贊皇朝、與聞政事、實爲陛下腹心不貳之臣。且攸爲人、修潔義信、加以懿親、志存忠貞。今陛下出攸之國、假以都督虛號、而無典戎幹方之實、去離天朝、不預王政。傷母弟至親之體、虧友于款篤之義、懼非陛下追述先帝文明太后待攸之宿意也。若以攸望重、於事宜出者、今以汝南王亮代攸。亮、宣皇帝子、文皇帝弟、幼・駿各處方任、有內外之資、論以後慮、亦不爲輕。攸今之國、適足長異同之論、以損仁慈之美耳。而今天下竊陛下有不崇親親之情、臣竊爲陛下不取也。若以妃后外親、任以朝政、則有王氏傾漢之權、呂產專朝之禍。若以同姓至親、則有吳楚七國逆亂之殃。歷觀古今、苟事輕重、所在無不爲害也。不可事事曲設疑防、慮方來之患者也、唯當任正道而求忠良。若以智計猜物、雖親見疑、至於疏遠者亦何能自保乎。人懷危懼、非爲安之理、此最有國有家者之深忌也。愚以爲太子太保缺、宜留攸居之、與太尉汝南王亮、衛將軍楊珧共爲保傅、幹理朝事。三人齊位、足

相持正、進有輔納廣義之益、退無偏重相傾之勢。令陛下有篤親親之恩、使攸蒙仁覆之惠。臣同國休戚、義在盡言、心之所見、不能默已。私慕魯女存國之志、敢陳愚見、觸犯天威、欲陛下事每盡善、冀萬分之助。臣而不言、誰當言者」。

(45) また、曹魏の王室の出身で當時博士祭酒であつた曹志は、魏において逼塞せしめられていた父曹植に思いを馳せつつ、王朝を永久に存続させる方策は、その權力を獨占することなく、常に人心を繋ぎ留め、天下とともに議することであり、それ故に天下の望である齊王攸が内に在れば國家は安泰であるが、逆に齊王攸を外に出すことは王朝の滅亡に繋がると、議論を展開する(『晉書』卷五〇、曹志傳)。

(46) 『晉書』卷三、武帝紀、「……平吳之後、天下乂安。遂怠於政術、耽於遊宴、寵愛后黨、親貴當權、舊臣不得專任、舞章素廢、請謁行矣。……」。また『晉書』卷四〇、楊駿傳。卷三一、后妃傳上、武悼楊皇后、附胡貴嬪。卷四五、劉毅傳參照。

(47) 齊王攸歸藩事件においても、クレーダーが起る可能性があつた。註(3)參照。

(48) 川勝義雄「シナ中世貴族政治の成立について」(『史林』三三一四、一九五〇年所收)、「漢末のレジスタンス運動」(『東洋史研究』二五—四、一九六七年所收)、「貴族制社會の成立」(『岩波講座「世界歴史」五、一九七〇年所收』。なお、中村圭爾「郷里」の論理、一六朝貴族社會のイデオロギー」(『東洋史研究』四一一、一九八二年所收)參照。

(49) 『晉書』卷五九、趙王倫傳、「(趙王倫)乃僭即帝位、大赦、改元建始。……孫秀爲侍中・中書監・驃騎將軍・儀同三司、張

林等諸黨皆登卿將、並列大封。……王興反之、……興自往攻〔孫〕秀、秀閉中書南門。興放兵登牆燒屋、秀及〔許〕超・〔士〕猗遽走出、左衛將軍趙泉斬秀等以徇。……」。

⑤ 『晉書』卷五九、趙王倫傳、「〔趙王〕倫素庸下、無智策、復受制於〔孫〕秀、秀之威權振於朝廷、天下皆事秀而無求於倫。秀起自琅邪小史、累官於趙國、以諂媚自達。既執機衡、遂恣其姦謀、多殺忠良、以逞私欲。……倫無學、不知書。秀亦狡黠小才、貪淫昧利。……孫秀既立非常之事、倫敬重焉。……」。

⑥ 『世說新語』賢媛篇注所引の傳暢『晉諸公贊』、「孫秀、字俊忠、琅邪人。初趙王倫封琅邪秀給爲近職小吏、倫數使秀作書疏、文才稱倫意。倫封趙、秀徙戶爲趙人、用爲侍郎、信任之」。

⑦ 陳寅恪氏は「天師道與濱海地域之關係」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』三一四、一九三三年原載、『陳寅恪先生論集』臺北、中央研究院歷史語言研究所、一九七一年等所收)の「趙王倫之廢立」の章で、濱海地域である琅邪郡で盛んであった天師道(五斗米道)に孫秀及び趙王倫が入信していたことを論じている。もう一つであるならば、趙王倫と孫秀とは、その信仰を一にすることで強く結びついていたとも考えられる。

⑧ たとえば、元康年間に趙王倫が長安に出鎮していた時も、孫秀は趙王倫の幕下にあり、内徙異民族の對策を誤り、齊萬年の反亂を惹き起こしている。『晉書』卷三六、張華傳。卷六〇、解系傳。『世說新語』仇陳篇注所引の孫盛『晉陽秋』。『文選』卷二〇、獻詩、潘岳『關中詩』注所引の傳暢『晉諸公贊』。

⑨ 『晉書』卷五九、趙王倫傳。

⑩ 『晉書』卷六〇、孫旂傳、「孫旂字伯旗、樂安人也。……名

位與二解(解系・解結)相亞。……遂與孫秀合族。……」。卷三一、后妃傳上、惠羊皇后參照。

⑪ 『晉書』卷五九、趙王倫傳、「〔孫〕秀子會、年二十、爲射聲校尉、尙帝女河東公主。……」。

⑫ 『晉書』卷三四、杜預傳、附杜錫傳、「趙王倫篡位、以爲治書御史。孫秀求交於〔杜〕錫、而錫拒之、秀雖銜之、憚其名高、不敢害也」とあり、仲間入りせんとして、貴族に交際を求めている。

⑬ 『晉書』卷四三、王戎傳、「初、孫秀爲琅邪郡吏、求品於鄉議。〔王〕戎從弟衍將不許、戎勸品之。及秀得志、朝士有宿怨者皆被誅、而戎・衍獲濟焉」。

⑭ 『世說新語』仇陳篇、「孫秀既恨石崇不與綠珠。又憾潘岳昔遇之不以禮、後秀爲中書令、岳省內見之、因喚曰、孫令憶曩昔周旋不。秀曰、中心藏之、何日忘之。岳於是始知必不免。後收石崇・歐陽堅石(建)、同日收岳。……」。同注所引の『王隱晉書』「岳父文德、爲琅邪太守、孫秀爲小吏給使。岳數蹴踢秀、而不以人遇之也」、『晉書』卷五五、潘岳傳、「初、莊爲琅邪內史、孫秀爲小史給岳、而狡黠自喜。岳惡其爲人、數撻辱之、秀常銜忿。……」。

⑮ 他にも、張華・裴頠・解系・解結兄弟・李重ら名士が孫秀の個人的な怨恨により誅殺されている。

⑯ 張方は河間王顒の部將であり、三王起義以來、しばしば河間王顒軍を率いて、洛陽に進駐、ついには惠帝を長安に拉致し、そのもとで中領軍・錄尚書事・領京兆太守となるに至ったが、こうした行動が、東海王越の河間王顒討伐の舉兵を惹き起こ

THE REALITY OF THE “WARS OF THE EIGHT KINGS” 八王之亂

FUKUHARA Akio

During the latter years of the Western Jin dynasty, which extended from the later third century to the beginning of the fourth, the so-called “Wars of the Eight Kings” occurred. Superficially, they appear to be a continuation of the struggles among the imperial family and the ruler’s maternal relatives. They however do not manifest simply the anarchic signs of a civil war. One verifiable tendency runs through these internal struggles. And the public opinion of contemporary society lay behind this tendency as a moving force.

Briefly, public opinion of that time had the rural community as its base and had, subjectively, contemporary officials as its constituents. Circumstances whereby the public interests of the state were subverted toward personal interests were acknowledged as a critical danger for the state. The public criticized the behavior of a ruler’s maternal relatives and a imperial family that strove to secure actual power to bend the state toward their own interests. Public opinion criticized the “Wars of the Eight Kings” as such a case where the state had turned toward private interests. That pattern emerges, according to that public viewpoint, in the circumstances surrounding the return to his own tenure of You, King of Qi 齊王攸 that occurred under the rule of Emperor Wu of Western Jin 晉武帝; and furthermore in the latter years of the Later Han; and finally in the struggles between the “*pure*” 清流 faction and the “*impure*” 濁流 faction that provoked the prohibition of cliques.

Public opinion was formed along the lines of the “*pure*” faction. In China, where the tendency toward unity generally prevailed, did not this public opinion assume the shape of that period’s tendency toward unity?

But, public opinion, which ought to have aimed for unity, actually supported the “Wars of the Eight Kings.” One reason why the Western Jin fell and unity failed was that people who conformed with public

opinion and actually seized power by mobilizing the army to topple the forces tending toward private interests were the imperial family, the ruler's maternal relatives, and the poor, powerless members 寒門寒人 below them, who were essentially the same as the forces which had to be toppled. They who had newly obtained real power instead bent the state toward their private interests and heralded a new struggle.

THE GOVERNMENT OF EMPEROR XIAOWEN 孝文帝 OF NORTHERN WEI

TAMURA Jitsuzo

In 471, Emperor Xiaowen acceded to the throne at the age of five as the sixth generation of ruling emperors of the Northern Wei dynasty and ruled for about thirty years until 499. Because of his youth, however, he did not actively manage a new government until the last ten years of his reign from about 490.

For this reason, in this essay, I have divided his thirty year reign into the first term and the latter term. The former is further divided into the cloister government period of his father Emperor Xianwen 獻文帝 which lasted for six years and the inner court period of his grandmother Empress Dowager Feng 馮太后 (Empress Dowager Wenming 文明太后) which lasted for fifteen years.

The following three topics concerning the inner court of Feng are discussed: the regulation of official salaries, the system of "equalizing fields" (*jintian* 均田), and the system of *sanzhang* 三長. The following two subjects concerning the later period of Emperor Xiaowen court are discussed: the change of the capital to Luoyang and the cultural revolution movement.